コラム

特別支援教育でのキャリア教育

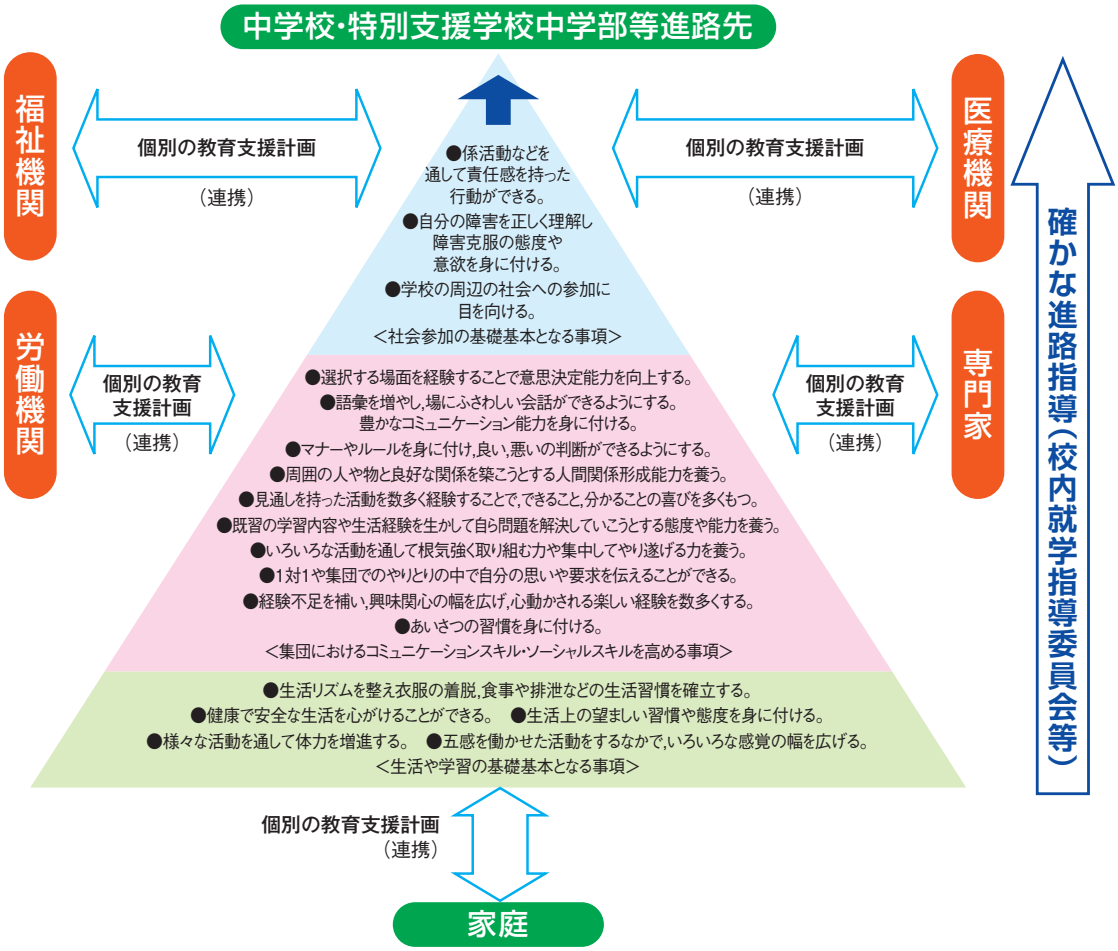
障害のある子どもの自立と社会参加を目指す特別支援教育においても，キャリア教育は重要な課題である。

特別支援教育では，一人一人の子どもの社会的な自立を目指して個別の教育支援計画に基づき保護者や医療機関，福祉機関等との連携を深めながら指導に当たることを目指している。次に示すのは，Ｃ小学校が考案した特別支援学級のキャリア教育構想図である。自立活動の指導を中心として，学校の教育活動全体を通して育てたい能力と，個々の子どもに応じた進路支援のための連携を含めて，指導の流れ図を作成し，特別な支援の流れを教員が共通理解するための資料としている。校内就学指導委員会は，特別支援教育担当者を中心にして，担任・養護教諭・管理職が子どものよさや可能性について多面的に情報交換を行う場である。

また，日頃から保護者に対する教育相談の窓口を設けておいたり，個人懇談会の日程に合わせて教育相談室を開設したりするなどして，通常の学級に在籍し特別な支援を必要とする児童にかかわれるようにしている。相談内容は，友人との人間関係や学習に関すること，家族関係など様々なことが予想されるが，その中から，例えば発達障害などの可能性があるケースを把握することができれば，発達障害者支援センター等の専門機関へ早期に相談をつなぐことが可能となる。

特別な支援を必要とする子どもにとって，キャリア発達の支援にはよりきめ細やかなものが必要となる。

将来の選択肢を様々に考えて，よりよい進路に進むことができるよう，学校全体で支援体制を整えていくことが大切である。



＜事例４＞　Ｄ教育センター
異校種間の学びのつながりを意識したキャリア教育

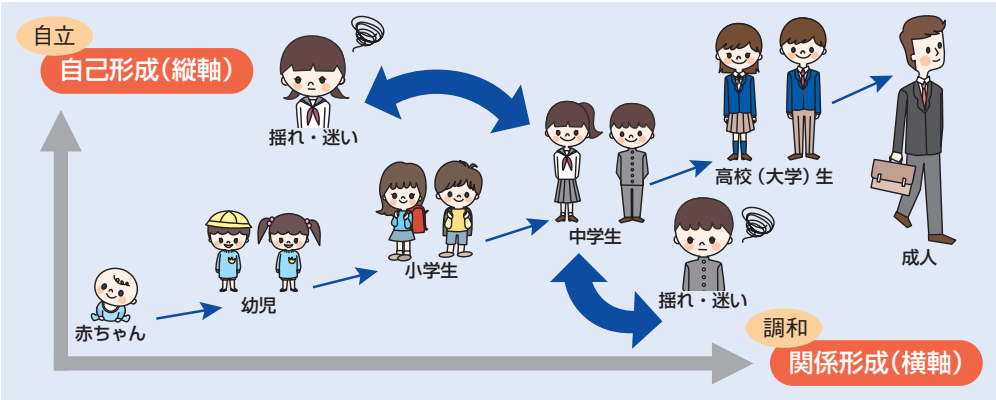
⑴　Ｄ市のキャリア教育の構想

生涯を通してのキャリア形成を支援する視点から，Ｄ教育センターでは発達課題を二つの領域からとらえ，各学校段階のキャリア教育の内容を提示している。以下は，Ｄ教育センターが作成したガイドブックの一部を引用したものである。

どんな段階で、どんなことをするの?

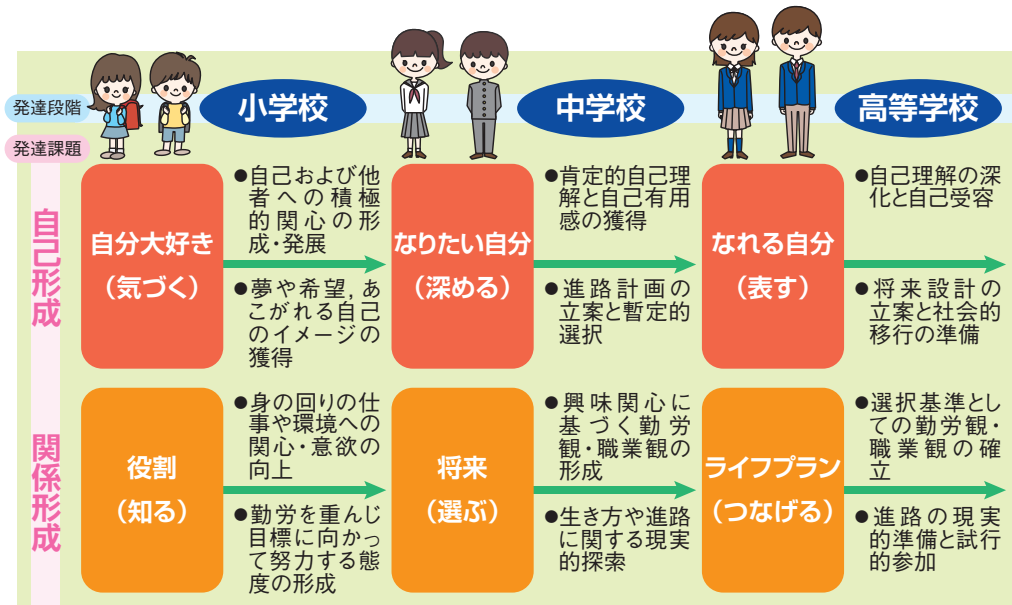
キャリア教育は発達の段階を考えて進めることが大切です。

【生涯学習におけるキャリア形成】



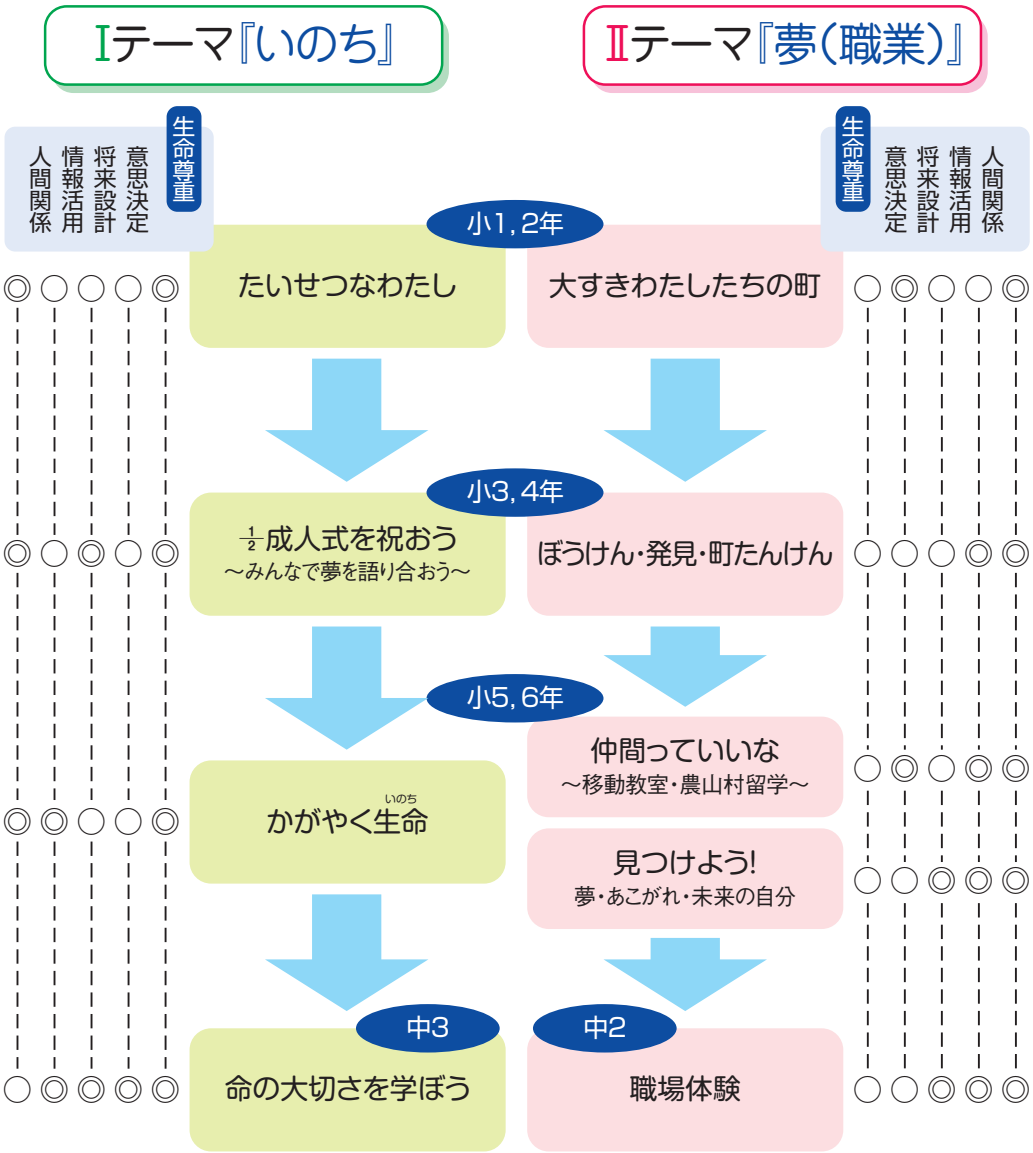
よりよく生きるために，小さい頃から生涯を通して，それぞれの段階で必要な課題（発達課題）があります。キャリア教育における発達課題を「自己形成」「関係形成」として，その内容を発達段階ごとにまとめると下表のようになります。

【自己形成と関係形成を育む内容】



このように，キャリア教育はそれぞれの課題を意図的計画的に解決し，社会というフィールドの中でたくましく生きる力を育んでいきます。

キャリア教育の学びのつながり（例）



テーマ『いのち』『夢（職業）』は，今までの実践を基に大きく
２つの内容で小・中学校のキャリア教育の学びをつないだ例です。
D市キャリア教育の参考プランとして提案します。

連携については既に２章でその有用性を述べているが，このように市がキャリア教育推進の指針を示すことで，それぞれの校種や異校種間の連携活動をスムーズに行うことができるようになる。子どもたちにとっても，上級学校を身近な将来の自分の姿としてとらえることができ，いわゆる小１プロブレム，中１ギャップなどを解消したり，交流活動を通して人間関係を形成する能力を高めることが可能である。

このような12年間を見通したキャリア教育を行うことで，ゆるやかに無理なくキャリア形成を支援することができるものと考える。具体的な異校種間連携の事例について，次に示す。

①幼稚園・保育所・小学校の体験入学での連携

幼稚園・保育所・小学校の連携でよく見られるのは，就学前の幼稚園児たちの体験入学の場で１年生が年長者としての役割を果たす行事である。１年生は年下の友達を迎える立場になって，会の進行や会場準備，プレゼントづくりなどに取り組む。できることを果たそうとする活動を通して自己の役割意識を高め，４月からは新しい１年生にどのようにかかわっていくとよいのかを考えるきっかけとすることができる。

おそらく，参加者の中には１年生が昨年度までお世話になった幼稚園や保育所の教職員がいると思われるが，そういう立場の人に１年生のがんばりを認めてもらう場を設けたい。家族や現在の担任以外の人で，１年間の自分の成長やできるようになったことを褒めてもらえることは大変な達成感を味わわせてくれるものである。異校種間の職員が日頃から連携意識をもつことで，このようなちょっとしたタイミングを逃さずにかかわることが可能となる。

②小学校・中学校の連携

中学校では，５日間の職場体験活動に取り組む。将来教職を目指す生徒は小学校での体験活動を希望することが考えられる。そのような生徒には，できれば出身小学校での体験をさせたい。そして５日間の中で，生徒が現在のがんばっている様子を紹介できる場を設けたい。例えば，部活動の腕前を披露したり，中学校の学習内容を紹介したりなどである。多くの中学校には複数の小学校から進学すると思われる。新しい友達との学校生活など，身近な将来のモデルとも言える中学生にじかに紹介してもらうことで，高学年の児童にはガイダンス的な役割にすることができる。「中１ギャップ」対策としても有効であろう。

③中学校・高等学校の連携

高等学校説明会の一部を，高校生に担当させることが考えられる。高校生は自分の学校の伝統について見直したり，所属意識を再認識する機会にもなろう。校章や校旗のデザインの由来を調べたり，校訓を中学生に分かりやすい言葉に直して紹介したり，可能であれば事前に高校内でリハーサルをすることも有効である。

一方中学生には，高校生に質問をする場を与えたり，主体的に参加できるよう工夫が必要である。保護者も参加して，自分の進路を自分で考えるための情報収集に真剣に取り組ませる場の設定が大切である。

専門高校は，長期休業中に体験活動などのイベントを開催することが多い。文化祭や総合的な学習の時間の活用を通して，現在自分が取り組んでいることを見直したり，意義を考えたりすることで，自分の言動への責任意識を高めることができよう。

相手に分かりやすい説明の方法など，望ましいコミュニケーションの図り方を，連携という場を利用してはぐくんでいきたいものである。

４章では，**168ページ**に異校種間での共同学習「３校交流集会」の事例を示している。

⑵　成果

○教育センターなどの教育機関が中心となって学校種の接続に積極的にかかわることで，同じ中学校に進学する複数の小学校で行われるキャリア教育の内容の差を解消できる。

○市全体としての取組が明確になることで，地域との連携においても受け入れ事業所の負担感の軽減やキャリア教育の目標の共通理解を得る面でメリットが大きい。学校にとっても，受け入れ事業所を探す苦労が軽減する。

○成果を公表して企業などにキャリア教育の体験受け入れ意識を高めていくことで，学校と地域が強く連携したシステムを構築することが可能である。